うつわから
広がる食育 ㉞

女子栄養大学短期大学部非常勤講師
資源と環境の教育を考える会『エコが見える学校』
関東学院大学非常勤講師
三信化工株式会社
海老原誠治
えびはら　せいじ
佐賀大学物理学科卒業，佐賀県立有田窯業大学校・常勤講師を経る。

◎政府インターネットテレビ『徳光・木佐の知りたいニッポン～守りつなぎ広める日本の心 和食』で和食器の給食、出前授業の様子が放送されています。

縄文の土器とイカ飯!?　繕いを思う

北海道は函館，少し北に行くと茅部（かやべ）の鰊（にしん）供養塔があります。念願叶い訪れたのですが，道中，興味深い多くの物に遭遇しました。２回に分けて紹介したいと思います。

縄文の「イカ飯」土器!?

茅部の鰊供養塔を目当てに訪れたのは森町です。ここはイカ飯の本場，駅弁でも有名です。しかも！ 奇しくも？ ここからは世界で唯一，縄文の「イカ形土製品」が出土しているとのこと。

保存している森町遺跡発掘調査事務所を訪れました。実物を見ると，サイズも形も確かにイカ飯そっくりです。中は中空で，すすが付いています。祭祀・儀礼の道具ともいわれますが，実際，何かは不明とのことです。あらっ？ 事前に調べたネットの画像とは違います。ネットではつぎはぎ（写真左）のイカ形土製品でしたが，目の前には一見，無傷な物（写真右）しかありません。一つしかないはずですが…。職員の方に聞くと，これは同一の物。かつての修復は，欠損部分がわかるように施していたのですが，現在では，欠損部分がわからぬように施し直したそうです。さて皆さまは，どのような印象を受けるでしょうか？

この修復方法の違いは，筆者にとって非常に興味深いです。欠損部分がわかると，出土の様子や，実際に当時の素材である部分がわかります。一方，きれいな状態だと，本来どのような物であったか，イメージがしやすくなります。が，当時の部分と後世の部分が区別できず，仮に修復の記録もない場合，成分や構造などの分析ができなかったり，そもそも本来の姿がわからない場合すらあります。

▲名物駅弁「いかめし」（左）と，
イカ形土製品の実物大しおり（右）

▶イカ形土製品の修復品。同一の物であるが，
欠損部分が明確な物（左）とわからない物（右）

【写真提供：北海道森町教育委員会】

▶唐招提寺　金堂（奈良）
790年ごろ創建（奈良時代, 天平文化）平成の大修理での調査から，江戸時代の修正（1692～94年；元禄５～７年）の際に，屋根が約２m高く修正されていることが判明

▲原爆ドーム（広島平和記念碑）

▲修復跡が残る縄文土器（森町遺跡発掘調査事務所, 北海道）

縄文から現代までの，繕い

すべての存在はかけがえのない物で，失われた物，傷付いた物は，決して元に戻りません。が，そのことが価値を失うこととは必ずしも限りません。繕いにもさまざまな思いがあり，変化を受け入れさらに変わるもの，現状を受け入れ留まるもの，元に戻りたがるものなどあります。

西洋でも修復学の専門分野があり，建築物や文化財のあり方を議論するそうです。例えば戦争の傷跡を遺す史跡の保存なら，幾つかのやり方が考えられます。

・戦争直前を復元（戦後との比較）
・戦争直後を復元または維持
・時代を経て，すでに風化・変化した現時点の状態を維持（戦後の記録）
・何も施さず，今後も経年の変化を受け入れる（共に歩む）

それぞれに意味があり，文化財の修復なら，現在の人だけではなく100年や1000年後の人にとっても意味がある形でないといけません。例えば原爆ドームという形の記録は，年々風化しているとはいえ，戦争の記憶を呼び起こせるように，なるべく被曝直後の時間の維持・保存が努められます。

和辻哲郎は著書『古寺巡礼』（岩波書店）にて，鑑真（がんじん）ゆかりの唐招提寺に関し，金堂の屋根と瓦の生み出す線の美しさと力のバランスを，天平の曲線として詠います。しかし近年の調査から，江戸時代の修理の際に屋根を約２m高く修正していることが判明しました。もし創建当時のままなら，和辻の賛美は存在しません。そう考えるとこの修正は，「繕い」と呼びたくなります。

話を北海道に戻すと，森町で心動かされたのが，縄文時代の「繕い」です。土器の割れ目を挟んで，２つの穿孔（せんこう）があります（写真上）。弦で結んだのでしょうか？　割れ目を練った穀物粉で埋めたかもしれません。どのような，保存・維持・修復，繕いにしろ，必ず何かの思いが込められます。愛着か希少さか，繕う縄文人と，それを使う縄文人の姿を想像します。